

企画事業 「ボランティアに関する事業」

事業名	ボランティアがつくるワクワクワークキャンプ	
実施期間	平成21年7月11日(土)～12日(日)	
担当者	企画指導専門職 中村 元	

I 事業の趣旨

現代の青少年には、社会の一員として、自己肯定感を高め、思いやりやコミュニケーションなどの人間関係能力を育む体験の積み重ねが必要とされている。これらの社会性や道徳性を総合的に育む教育効果の高いボランティア活動が学校や地域、社会でも教育活動の一環として広く行われるようになった。

国立青少年教育振興機構の各施設には、施設運営に係わる法人ボランティアを登録するシステムがあり、統一されたカリキュラムを実施し、ボランティアの養成や実践が行われている。

当所では、施設のボランティアを養成する「ボランティアセミナー」と養成したボランティアに活動の機会を提供する「ボランティアがつくるワクワクワークキャンプ」を実施し、ボランティア活動を通じた青少年教育を推進している。

II 事業の概要

1 事業の目的

事業に先立ちボランティアが主体的に事業の企画・立案に関するワークショップを行い、ボランティアに必要な資質を高めつつ、実践的取り組みとして小中学生キャンプの運営を行い、支援者としての技術的側面を培うものである。

大学生を中心としたボランティアと小中学生の異年齢交流を深め、集団宿泊、炊飯活動、海洋研修等とおして子どもたちに自然体験活動の意義を伝え、青少年の健全育成を推進する。



【アイスブレイキング】

2 参加対象及び募集人員

- (1)法人ボランティア 15名
- (2)県内小学生 50名
- (3)県内中学生 30名

3 参加状況

- (1)法人ボランティア 14名
- (2)県内小学生 59名
- (3)県内中学生 27名

4 事業内容

(1)事業企画

事業実施2ヶ月前に、沖縄交流の家の職員を交えて第1回目の打合せを行い、キャンプの日時や実施までのタイムスケジュール、ボランティアの体制作りを検討し、その後は、キャンプのねらいからプログラム内容や役割分担、チラシの作成までボランティアが中心に企画や準備を行う。

ただし、募集に関する学校への案内やキャンプに必要な物品などの準備は沖縄交流の家が協力・支援する。

(2)事業運営

海洋研修場及びキャンプ場を会場に1泊2日の日程で企画したキャンプの全ての運営をボランティアに一任し、必要に応じて、沖縄交流の家が協力・支援する。

ボランティアは、全体を指揮するリーダーと班付のボランティア、陸や海のプログラム担当などに分かれ、事業運営を行う。



【火おこしの指導】

5 実施上の留意事項

参加する小中学生の健康管理や安全面への配慮、事業の企画立案に関する考え方などのアドバイスをを行い、可能な限りボランティアがキャンプを創り上げることを念頭に支援を行う。

ボランティア相互のコミュニケーションを深めながら試行錯誤を行い、意見をまとめ進行できるゆとりの時間を確保できるように、十分な準備期間を設ける。

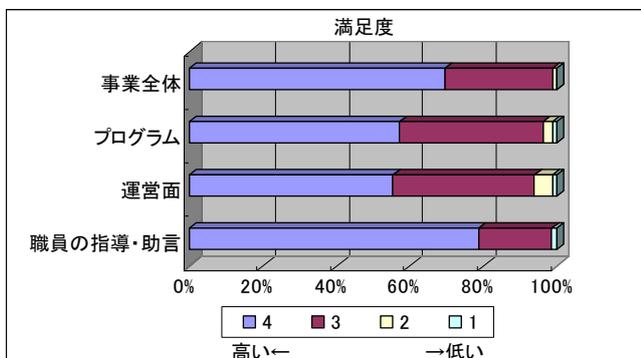


【野外炊飯・カレーライス作り】

6 アンケート結果

ワクワークキャンプに参加した児童生徒へ満足度に関するアンケートを実施した。

すべての項目の満足度が9割以上という評価で、児童生徒にとって、充実したプログラムが展開できたことがうかがえる。



(1) ボランティアの対応に関して（一部抜粋）

- ・色んなことを教えてくれて、メッチャ助かりました。
- ・沢山しゃべった。ボランティア全員と話しができた。
- ・とても頑張っていたので、すごく良かった。
- ・色んな事をやってくれたり、準備してくれた。

(2) 自由記述欄より（一部抜粋）

- ・親がいなくて仲間とボランティアだけだったから、仲間の大切さがわかった。
- ・仲間で協力してカレーを作ったり、レクをしたりして1泊2日の短い時間だったけど、とても充実していた。
- ・普段、体験しなかったことを学べて良かった。色々初めてやって感動したし、大切な思い出になった。

- ・初めて会う人たちと共に生活して、交流が深められて良かった。キャンプを通して、いろんな友達ができた。
- ・キャンプを通して、親の大変さがわかった。家での生活と比べて難儀だなということをととても感じた。
- ・自然体験でいろんな事に触れ合ったり、協力して団円で生活できたので良い経験になった。

本事業の対象であるボランティアへのアンケートはキャンプ運営へ支障をきたすため、事業期間中に実施せず、後日、反省会を行った。



【キャンプファイヤー】

Ⅲ 成果と課題

1 事業の成果

- (1) ボランティア自らが「普段できない年の差をこえた活動の中で、新しい友達を作り、協力し合う機会にする」というキャンプのテーマを掲げ、企画や準備に十数回の打合せを重ね、安全に実施することができた。
- (2) 参加した児童生徒及びボランティアの青年との異年齢交流ができた。



【海洋研修・大型カヌー】

2 今後の課題

事業後の反省会をボランティアのみで実施した。反省会に寄せられた声は、達成感もあるが疲労度、負担感も大きい。1人1人のボランティアの様子を見ながら支援を行う必要があり、社会の一員として、これらの体験を活かすために、交流の家職員によるふりかえりの実施が必要であった。